

日本テレビ放送網が「日テク 2019」を開催

神谷 直亮

日本テレビ放送網が、3月12日～13日に汐留の本社で「日テク 2019」を開催した。同社は、これまでテレビ放送とテクノロジーをテーマに「デジテク」(2002～2016)、「クリエイティブテクノロジーラボ」(2017～2018)を開催してきたが、今年から「日テク」に名称を変更した。

「日テレ x テクノロジー x 働き方改革」をテーマに掲げた今回の「日テク 2019」の展示とデモは、「特別展示」「番組制作」「業務支援」「AI x テレビ」「新サービス」「ネット局」の6つのステージで構成されていた。

「特別展示」は、「アオイエリカと無人のスタジオ」で、2階のロビーを使って独自の無人化構想を大々的にアピールした。その名称の通り、アンドロイドアナウンサーのアオイエリカが取り仕切る無人スタジオが設営され、パナソニックの4Kマルチパーパスカメラ「AK-UB300」と4Kインテ

グレートッドカメラ「AW-UE150」、ニコンの一眼レフカメラ「D5」など5台のカメラが、SHOTOKUのロボット雲台「Smart Ped」やニコンシステムの「Robotic POD」で巧みに自動制御されていた。スタジオでは、実際にアオイエリカと外国人ゲストとの英語による大胆な対談も行われ来場者の意表を突いた。アンドロイドなので仕方がないとは言え、アオイエリカの間合いの取り方や口の動きに少々ざこちなさを感じられ今後の改良に期待したい。

「番組制作」のステージでは、まず「日テレ新スタジオ(番町スタジオ)4K映像システム」「日テレ・テクニカル・リソース(NiTRO 渋谷)の8K編集室」「新・日テレNews24マスター」の紹介が行われた。

一月末にオープンしたばかりの「番町スタジオ」には、日テレ初の4K HDR対応C1、C2スタジオが整備され、ソニーの

4Kスイッチャー「XVS-8000」、HDRプロダクションコンバータユニット「HDCR-4000」、4Kカメラ「HDC-4300」6台、朋栄のルーター「MFR-4000」などが導入されているという。

NiTRO 渋谷は、4K対応のポストプロとして知られているが、今回は3月末にオープンする予定の8K編集室のPRに余念がなかった。担当者は、「Blackmagic Design社のDaVinci Resolve、Colorfront社のTranscoder、NIXUS社のTelop Canvas、パナソニックのAVC-Intra 4:2:2対応の8Kレコーダー「AJ-ZS0580」、シャープの8K HDR液晶テレビなどを導入している」と説明していた。その他、同社が所有する4Kカメラ(ソニーのPXW-Z190とパナソニックのAG-CX350)、4K中継車(OB-ONEとOB-X)、超小型4Kカメラ(おいぬビジョンとの共同開発)、ドローン(MAVIC2 Pro、Phantom 4 Pro、Inspire2)などが披露され目を見張るばかりであった。

更新したばかりの「新・日テレNews24マスター」については、「可搬アンタイムTAKEBOXやワンタッチ収録など、番組制作を支援する新機能が採用されている」と語っていた。なお、日テレは、地上波放送用のマスター、BS日テレ用のマスターを運用しており、これが3つ目のマスターとなる。



写真1 「特別展示」会場では、「アオイエリカと無人のスタジオ」の実演が注目を集めた。



写真3 NiTRO 渋谷は、バレーボールの試合などに活用しているという超小型4Kカメラも紹介していた。



写真2 NiTRO 渋谷は、パナソニックの業務用8K収録機「AJ-ZS0580」を導入して万全の態勢を取っている。



写真4 中継現場で回線収録、ハイライト編集、送出などができる「可搬型ノンリニア編集システム」が披露されて関心を呼んだ。



写真5 会場には、AR撮影装置「Mixtra Shot」が設置され、来場者が選択したアナウンサーとの静止画撮影を楽しんでいた。

次いで、同ステージでは、「HDR から SDR への変換方式」「情報遺漏防止型 SD カード」「可搬型ノンリニア編集システム」が目を引きつけた。

「HDR から SDR への変換方式」については、広いダイナミックレンジを持つ HDR 映像の見た目を維持したまま SDR 映像に変換する「トーンマッピング方式」を採用し、変換前後の映像を再生して見せていた。「ラグビーワールドカップ 2019 日本大会」の生中継を NHK と共に取り組むことになり、効率的な HDR・SDR 同時制作が喫緊の課題になっているという

「情報遺漏防止型 SD カード」は、その名称の通り盗難や紛失による情報漏洩を防止できるロック付き SD メモリーカードで、素材読み出し時に NFC 機能を活用してロックを解除する仕組みになっていた。この東芝製で「Mamolica」と名付けられたカードの発売予定を聞いて見たら「4K 対応の 128/256GB モデルをまだ開発中。法人向けには 4 月中に提供を開始できる見通し」との回答であった。

「可搬型ノンリニア編集システム」は、中継現場に仮設するサブコン設備の一部という位置づけで、回線収録、ハイライト編集、送出などができるようになっている。担当者は、「年に 6 回程度行っているゴルフ中継や災害発生時などに役立つのが主目的」と述べていた。

「テレビの現場を AI で変える」をキーワードにした「AI x テレビ」のステージの目玉は、今年の箱根駅伝で実証された「箱根駅伝 x 画像認識 AI」である。ここでは、「選手名のテロップ自動生成」「選手間距離の自動推定」「距離計連携による制作支援」の 3 つを取り上げ、モニターで実例を誇示していた。いずれも AI による番組制作の現場作業の効率化を見事に達成できており素晴らしい。具体的には、「選手名のテロップ自動生成」については、「大学ごとに異なるユニフォームの AI 認識が選手特定の重要なカ

ギ」と語っていた。また、「選手間距離の自動推定」に関しては、「正面からの縦撮りの場合は、画面に入る路面の白線（5m 間隔）をベースに推定する。横撮りの場合は、選手の顔の大きさを推定基準にしている」と説明していた。

「距離計連携による制作支援」は、中継車の撮影映像から画像認識 AI 技術で大学を特定し、制作スタッフが展開中のレースの順位を瞬時に把握できるようにしたシステムである。

その他「AI x テレビ」のステージは、「AI 顔認識による被写体人物特定」「AI によるニュース原稿自動要約」「AI うさんとお話をしよう」「AI 家売るオンナ」など、まさに AI のオンパレードであった。

「業務支援」のステージでは、「ウェブブラウザだけで簡単番組制作」と「パソコン業務を自動化！RPA (Robotic Process Automation) への取り組み」の 2 件が披露され関心を買った。「RPA ソリューション」については、パンフレットが配られ「ホワイトカラーのデスクワークをルールエンジンや AI などの技術を備えたソフトウェアのロボットが代行・自動化する概念」と定義していた。実際に日テレでは、「厚生労働部が日々行っている勤怠管理システムのデータ承認作業や営業部門が毎月行っている営放システムを使った契約情報の登録作業をすでに自動化して、作業時間を削減している」という。

「新たなコンテンツサービスのかたち」と銘打った「新サービス」のステージでは、「AR 自動撮影ユニット、ミクスタショット (Mixtra Shot)」と「テレビバ」が紹介されていた。

日本テレビの独自開発と言う「Mixtra Shot」は、AR (拡張現実) 撮影装置だ。ユーザーは、タッチパネルで AR コンテンツを選択して大型モニターの指定された位置に立ち、選択したタレントやアナウンサーと一緒に静止画や動画の撮影を行うこと

ができる。担当者は、「電子マネー決済や QR コードの技術を使用しているので、効率的に AR コンテンツ販売が可能。また、撮影休止時には、PR 用の動画を再生してデジタルグッズの販売もできる」と売り込んでいた。

「テレビバ」は、日テレの新ショート動画サービスの名称で「YouTube、Yahoo! Japan など様々なプラットフォームで番組関連動画やオリジナル動画を無料で視聴できる」というのがウリである。このサービスは、昨年日テレ内に新設された ICT 戦略本部のアウトプット第一号とのことであった。

「ネット局」のステージでは、地方局（山形放送、テレビ信州、札幌テレビ放送）が開発した成果が公開された。

山形放送が取り組んでいるテーマは、「誤テロップを無くせ！自動校正ツールと AI 活用」だ。同社が開発した「セバスチャン」と名付けた自動校正ツールと AI を駆使してオンエア画面にスーパーされているテロップのチェックを自動で行うことができる。担当者は、「目下この自動チェック技術を鋭意検証実験中」と語っていた。

テレビ信州は、「地デジ放送波で届けるオリジナルデータ配信！ナローキャスト放送」の PR に余念がなかった。具体的には、地上波の伝送容量の一部 (200Kbps) を使ってデジタル TV サイネージサービスを実現している。

札幌テレビ放送は、「字幕付き CM ファイリング・オンエア監視システム」を開発して「放送局における CM バンクプレビューとオンエア監視の負担を軽減することができた」と語っていた。